

国語

注意

- 1 開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- 2 解答は、全て解答用紙に記入しなさい。
- 3 漢字は楷書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。
- 4 解答を選択肢から選ぶ問題は、記号で書きなさい。
- 5 問題用紙は、冊子の形になっています。
- 6 問題は、表紙の裏を1ページとし、6ページまであります。開始の合図で問題用紙の各ページを確認し、始めなさい。
- 7 問題用紙の表紙と解答用紙の受検番号欄に、それぞれ受検番号を記入しなさい。

受検番号

一

次は、タンポポについて書かれた【本の一部】と【資料A】、【資料B】です。これらを読んで、後の1から5までの各問いに答えなさい。

【本の一部】

よく知られているように、タンポポには外国からやってきた外来の西洋タンポポと、昔から日本にある在来の日本タンポポに大別される。実際には、西洋タンポポと呼ばれる中に、セイヨウタンポポやアカミタンポポなどいくつかの種類があり、日本タンポポの中にもカントウタンポポやカンサイタンポポなどいくつかの種類があるが、ここでは単純に「西洋タンポポ」、「日本タンポポ」と表現することにしよう。

タンポポを指標とした「^aタンポポ調査」と呼ばれるものが、よく行われている。西洋タンポポは都市化したところに多く分布する。これに対して、日本タンポポは、自然の残った田園地帯や郊外によく見られる。そのため、西洋タンポポと日本タンポポの分布を見ると、環境が都市化しているかどうかはわかるのである。

じつは、日本タンポポは自然が豊かで、他の植物が生えているところでは有利さを発揮する。たとえば、日本タンポポは西洋タンポポよりも種子が大きい。確かに遠くまで飛ばすという点では大きくて重い種子は不利である。しかし、大きくて重い種子からは、大きな芽を出すことができる。これは他の植物の芽生えと競って伸びるためには、必要なことだ。さらに、他の花の花粉と交配することで、バラエティに富んださまざまな子孫を残すことができる。多様な子孫を残すということも、多様な環境があり、さまざまな病害虫に対処しなければならない自然の中で生き残るには大切なことである。

そして、^b重要な戦略は「春にしか咲かない」ということである。日本タンポポは春に咲いて、さっさと種子を飛ばすと、根だけ残して地面から上は自ら枯れてしまう。これは、冬眠の逆で夏に地面の下で眠っているので、「夏眠」と呼ばれている。

夏が近づくと、他の植物が枝葉を伸ばし、生い茂る。そんなところで、小さなタンポポが頑張っても、光は当たらず生きていくことができない。そこで、強い植物との無駄な争いを避けて、地面の下でやり過ごすのである。

ライバルが多い夏にナンバー1になることは難しいから、ライバルたちが芽を出す前に、花を咲かせて種を残すという戦略なのである。

一方、西洋タンポポは日本の四季を知らないから、他の植物が生い茂る夏の間も、葉を広げ花を咲かせようとする。そのため、西洋タンポポは枯れてしまい、生きていくことができないのだ。同じように枯れているように見えても、自ら葉を枯らして眠っている日本タンポポはまったくダメーじがない。一年中咲いている西洋タンポポに比べて、春しか咲かない日本タンポポは劣っているようにも思えるが、じつは戦略的だったのだ。

このように、西洋タンポポは他の植物が生えるような場所には生えることができない。だから、その代わりに他の植物が生えないような都会の道ばたで花を咲かせて、分布を広げているのである。西洋タンポポが広がり、日本タンポポが少なくなっているという現象は、単に他の植物が生えるような元々の日本の自然が減っているからだだったのである。

(注) 指標＝物事を判断したり見当をつけたりするための目印。

(稲垣 いながき)

榮洋 ひでひろ

『植物はなぜ動かないのか』による。()

【資料A】

セイヨウタンポポは なぜ増えているのだろう

セイヨウタンポポは繁殖力が強く、大規模な開発にともなう都市環境の増加を背景に、その勢力範囲を拡大しつづけている。

一方の在来種のタンポポは、夏は葉を枯らすなど、草むらが掘り返されず維持されるような人里の環境に適応した生活史をもっている。しかし、開発により人里環境が失われるにつれ、生育地も個体数も少なくなっている。

(注)

生活史 = 生物が生まれてから死ぬまでの生活の移り変わり。

(多田 多恵子 総監修)

『大自然のふしぎ 植物の生態図鑑』による。

【資料B】

タンポポは戦争しているの？

よくいわれるようにタンポポの在来種と外来種は戦争をしているのでしょうか。在来種と外来種の生活や仲間のふやし方を比較してみましょう。

①花期

在来種は春だけ。

外来種はほぼ一年中。

②種子の数

在来種は花が小さく種子の数も少ない。

外来種は花が大きく種子の数も多い。

③種子の散布

外来種のほうが軽くて遠くまで飛んでいく。

④受粉

在来種はほかの株の花粉がつく他家受粉でないと種子ができない。そばに仲間の株があることが必要。

外来種は自家受粉でも種子ができるだけでなく、受粉しなくても種子をつくる能力がある。

⑤現状

外来種は都市部に多く、在来種は田園部に多い。

(星野 義延 監修)

『田んぼの植物なるほど発見!』による。

1 次の【表】は、西洋タンポポと日本タンポポの生育地について、【本の一部】、【資料A】、【資料B】に書かれている内容を整理したものです。【表】の I と II に当てはまる適切な言葉を、それぞれの文章中から抜き出して書きなさい。

【表】	【本の一部】	【資料A】	【資料B】
西洋タンポポ (外来種)	I	都市環境	都市部
日本タンポポ (在来種)	自然の残った田園地帯や郊外	II	田園部

2 【本の一部】では、日本タンポポの種子の散布について、どのように書かれていますか。書かれている内容を【資料B】の「③種子の散布」の書き方を参考にして、解答欄の「在来種のほうが」という書き出しに続けて書きなさい。

3 【本の一部】の——線部 a について、この調査では、何を調べることがわかりますか。書きなさい。

4 【本の一部】の——線部 b について、日本タンポポがこのような「戦略」をとっているのはなぜですか。その理由を七十字以内で書きなさい。

5 【資料B】の見出しの「タンポポは戦争しているの？」という問いに対する答えを、【本の一部】の内容をふまえて、理由とともに書きなさい。

ひろみさんは、【本の一部】を読んで、わかったことや考えたこと、グループでの交流を通して大切だと思ったことなどを【ひろみさんのノート】にまとめています。これらを読んで、後の1から5までの各問いに答えなさい。（【本の一部】の①から⑥は、段落の番号を表します。）

【本の一部】

自分と対話し言葉を探す

① コミュニケーションが深まっているときは、相手とだけではなく、自分自身と対話している感覚がある。すぐに言語化できる事柄だけを話しているのでは、浅い会話になってしまうものだが、自分の中に埋もれている暗黙の知を掘り起こしながら対話することで、深い対話ができるのだ。自分の中に眠っているものを掘り起こすのは、精神的に労力を必要とする作業だ。

② 文章を書くという作業は、自分自身と対話する作業である。自分でも忘れていることを思い出し、思考を掘り下げる。長い文章を書いたことのある人ならば、それが苦しく充実した作業だということを知っている。日記をつけるという行為も、自分自身と向き合う時間をつくることになる。言葉になりにくい感情をあえて言葉にすることによって、気持ちに整理がついていく。言葉にすることによって、感情に形が与えられるのだ。

③ 対話を深めるための工夫として、自分自身と対話する関係を対話中にもつくるということがある。意識の全体量を十とすると、相手とのその場の会話に十使ってしまうのでは、浅い会話になる。そこで、半分の五を自分自身への問いかけに使ってみる。慣れないうちは、相手への意識と自分への意識の二つを両立させることが難しいかもしれない。そのために会話が途切れ途切れになることもあるだろう。しかし、そうした練習期間を経ることによって、自分自身と対話する構造を対話に組み込むことができるようになるはずだ。

④ 私はさまざまな領域の人と対話する機会がある。そんななかで、相手が言葉を探しているときが、よくある。私の投げかけた問いに対して、真剣に答えようとして、自分の感触にびったりとした言葉を探している時間だ。逆に、そうした時間をまったく持たず、現在流れている会話の流れをひたすらつないでいるだけの会話もある。自分自身の経験全体に常に向き合い、相手から来る言葉の刺激をその経験全体に一度及ぼし、そこから出てくる感触を言葉にしてみる。この精神の作業は、慣れてくれば比較的短い時間でできるようになる。だが、語彙（ボキャブラリー）があまりに少ないと、微妙な感覚を言葉にしにくい。また、言葉をむやみにこねくり回してしまう場合は、自分の感触への問いかけが足りないケースである。

⑤ 伝え合うのは意味である。その意味は、心の感触とともにある。ちょうどいい言葉が見つかったときに、「そうそう、ちょうどその言葉がぴったりだ」という感触を得る。先に感触があるのだ。何となく捉えたその感触を手探りで言葉にしていく。言葉にしにくい「心の感触」をあきらめず辛抱強く持ち続ける精神的な強さが、深い対話をもたらす。

⑥ 相手と話している文脈は維持しながらも、自分自身の経験知の深みに降りていく。この二つの作業を同時に行う能力が、対話力である。さらに、より高いレベルの対話力とは、相手の経験世界にまで思いを馳せることだ。相手が自分自身の経験を振り返り、微妙な心の感触を言葉にする作業を促し、それにつき添う。自分自身に向き合う習慣のない人もいるが、こちらからの質問によって、そうした人も自分自身の経験に深く入っていく。海中に潜ってアワビや真珠をとってくる海女さんのように、自分の経験世界に潜っていく。そうした作業を助ける対話力というものがあるのだ。対話に参加している者が皆、自分自身の経験世界に碇を降ろし、一方で文脈の流れをつないでいる。それがコミュニケーションの優れた形なのである。

（注） こねくり回す＝物事を何度もいじりまわして複雑にする。

（齋藤孝 『コミュニケーション力』による。）

解決したい課題

見出しの「自分と対話し言葉を探す」とはどのような意味か考える。

注目した言葉や表現

「深い対話」

- ① 自分の中に埋もれている暗黙の知を掘り起こしながら対話することで、深い対話ができる。
- ③ 対話を深めるための工夫：自分自身と対話する関係を対話中にもつくる。 a
- ⑥ 対話力：相手と話している文脈は維持しながらも、自身の経験知の深みに降りていくという二つの作業を同時に行う能力のこと。
・より高いレベルの対話力：相手の経験世界にまで思いを馳せること。

課題についてわかったことや文章を読んで考えたこと

「自分と対話する」とは、自分の内面と向き合うことであり、自分とも相手とも対話することで、より深い対話になるということがわかった。
優れたコミュニケーションのためには、対話力を高めることが大切だと思う。

グループでの交流を通して大切だと思った言葉や表現

「浅い会話」

- ① すぐに言語化できる事柄だけを話している。
- ③ 相手とのその場の会話に意識の全体量の十を使ってしまう。
- ④ 現在流れている会話の流れをひたすらつないでいるだけ。
語彙があまりに少ない：微妙な感覚を言葉にしにくい
言葉をこねくり回す：自分の感触への問いかけが足りない

「心の感触」

- ⑤ 言葉にしにくい「心の感触」をあきらめず辛抱強く持ち続ける精神的な強さが、深い対話をもたらす。
- ⑥ 相手が自分自身の経験を振り返り、微妙な心の感触を言葉にする作業を促し、それにつき添う。
：相手に、自分自身に向き合うことができるような b
ことで作業を助けることができる。

グループでの交流を通してわかったこと

「言葉を探す」とは、簡単に言葉にならないことであっても、心の感触にびったりの言葉を見つける努力を続けることであり、「自分と対話する」ためには「言葉を探す」ことが大切だとわかった。
筆者が述べている「コミュニケーションの優れた形」とは、

c

だとわかった。

1 【ひろみさんのノート】の a に当てはまる、——線部と同じ内容を表す別の言葉を、【本の一部】の文章中から二十字以内で抜き出して書きなさい。

2 【ひろみさんのノート】の b に当てはまる適切な言葉を五字以内で書きなさい。

3 2段落について説明したものと最も適切なものを、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 1段落の内容を受けて新たな問題を提起し、読者の関心を高めている。
- イ 1段落の内容と対立する意見を示し、読者に異なる視点を与えている。
- ウ 1段落の内容に関連する具体的な例を示し、読者の理解を促している。
- エ 1段落の内容を支える根拠を明らかにし、読者への結論を示している。

4 【ひろみさんのノート】の c に当てはまる適切な言葉を七十字以内で書きなさい。

5 【本の一部】に書かれている「自分と対話し言葉を探す」ということについて、あなたが考えたことを、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

条件1 【本の一部】から言葉や表現を引用して書くこと。

条件2 原稿用紙の正しい使い方にしたがって、百字以上、百四十字以内で書くこと。



次の1から4までの各問いに答えなさい。

1 次の①から⑤までの文中の——線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

- ① 敵しい態度でノゾむ。
- ② セイケツなハンカチを用意する。
- ③ 平和がエイキユウに続くことを願う。
- ④ 彼は的をイタ質問をした。
- ⑤ 日光をアびる。

2 次の①から⑤までの文中の——線部の漢字の正しい読みをひらがなで書きなさい。

- ① 活動の源泉は休養にある。
- ② 決定を班長に委ねる。
- ③ 彼女の存在はチームにとって頼もしい限りだ。
- ④ 円熟した演技を見せる。
- ⑤ 傾斜の緩い坂道を登る。

3 次の文を読んで、——線部「どうしても」と修飾・被修飾の関係にあるものを、~~~~~線部aからdまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

どうしても旧暦の正月の前に、^a住み慣れた古い家に別れ、^bなじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立^cてている異郷の地へ^d引越さねばならない。

(魯迅・作 竹内好・訳 『故郷』による。)

4 次の文は、「古典の文章の冒頭の部分」とその【現代語訳】です。これらを読んで、後の①と②の各問いに答えなさい。

【古典の文章の冒頭の部分】

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。

【現代語訳】

祇園精舎の鐘の音には、この世のすべては絶えず変化していくものだという響きがある。沙羅双樹の花の色は、盛んな者も必ず衰えるものであるという道理を表している。

① ——線部「花の色」と対になっている部分を【古典の文章の冒頭の部分】の中から抜き出して書きなさい。

② 【古典の文章の冒頭の部分】の作品名を漢字四字で書きなさい。

